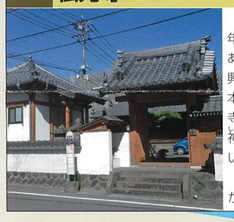
みなみおおいた未来創造史跡マップ

みなみおおいた未来創造まちづくり協議会

1 仏光寺



醫王山仏光寺の開山は行基（ぎょうき）（天平年間）といわれている。当初は法相宗の寺院であったが、室町期の永世年間（１５０４年頃）に中興開山し、臨済宗に改宗した。

本尊は薬師如来（運慶作）で秘仏とされる。また、寺には府内藩主松平近説の筆といわれる「十六善神図」が所蔵されており、大分市の文化財となっている。

また、明治6年（１８７３年）頃、ここで学校が開かれたといわれている。

2 三福寺

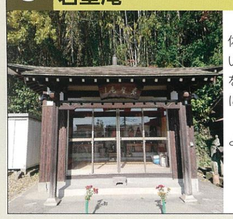
寺伝では、正因山三福寺は当初下郡村に在し、兵火に遭い焼失したという。文明2年（１４７０年）現在地に移転し、隆盛を極めたという。

境内の厄除け地蔵菩薩は行基作といわれている。

三福寺は作家の林房雄、そして幕末期府内藩の財政再建に尽くした広瀬久兵衛及び大友18代親治公ゆかりの寺でもある。

門前には南大分で最も大きい宝篋印塔がある。

3 岩聖庵



慶長4年（１５９９年）、古国府村工匠の利光自休の草創といわれている。利光自休は往時名工といわれた宮大工で、弥栄神社や柞原神社の山門を建てた人でもある。また、京都の清水寺の建築に関わったともいわれている。

お堂は１９４０年に建立されたが、近年、有志により再建された。

4 岩屋寺石仏

龍ヶ鼻の岸壁に刻まれた磨崖仏で、平安時代末期の作ではないかといわれている。

石仏は全部で17体と推測されるが、今は仏体の形がわからないほど風化が著しい。一番右端に唯一形をとどめている十一面観音立像があり、その他は判別が難しいが、中央に大日如来坐像、左右に如来像が刻まれ、これを中心に三尊仏が構成されている。

5 大国社（印鑰社）

「印」と「鑰」を神として祀ったことから印鑰社、俗に「インニャクさま」と呼ばれていた。

建久年間（1190～1198年）、国府跡といわれる現在地に創建したとされ、豊後守護職になった大友氏が関わったといわれている。室町時代の享禄元年（1528年）、火災で社殿が焼失し、印も鑰も溶けてしまったとされている。そして、江戸時代に入って再建するとき、祇園社の神「素戔嗚尊」の子「大国主命」を祭神とし、神社の名称を「大国社」とした。

現在も近隣の人々は「インニャクさま」と呼んでいる。

6 大友孝親の墓

大国社の南、花園地区に字高近の地名が残り、大友氏11代親著の長子・孝親の墓が祀られている。大友時代、古国府花園に大友屋敷があったと伝えられており、字高近は大友孝親の屋敷があった処といわれている。

応永32年（1425年）、大友氏11代親著が自身の長子孝親に家督を継がせず、10代親世の子持直に継がせたことから孝親が反乱を起こし、同地で自滅した事件を三角畠の乱という。三角畠は現在の天まで上がれ古国府店周辺といわれている。

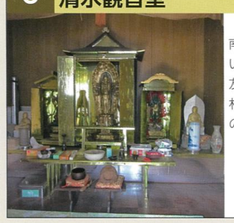
7 羽屋天満社

古い記録によれば、戦国時代には天満社が祀られ、百手祭も行われていたと思われる。百手祭は、羽屋村の東、中、西の3組に分かれて鬼の字を書いた的を歩射し豊作を祈願する祭りであった。

天満社は戦国末期の兵火で焼失、江戸期の1651年に再建されたが、近年の平成4年4月に全焼、同年12月に氏子らによって再建された。

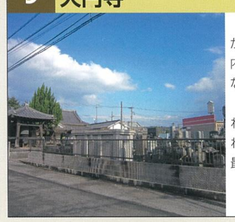
また、ここには南大分のどこからでも見える大きな木があったといわれている。

8 清水観音堂



観音堂に安置されている千手観音は、もともと南太平寺にあった清水寺の観音さまであったといわれている。天正14年（１５８６年）の島津・大友合戦で、太平寺などと共に寺が焼失したとき、村人によって救い出されたと伝えられている。その後、羽屋の現在地にお堂を建てて祭っている。

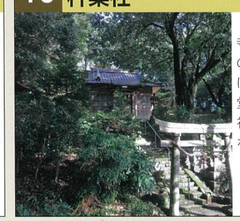
9 大円寺



寛永15年（１６３８年）来迎寺僧祥空智道上人が開山し創建した。当初は浄安寺と号したが、府内浄安寺が府内藩主大給（松平）公の菩提寺となったため大円寺と改めた。

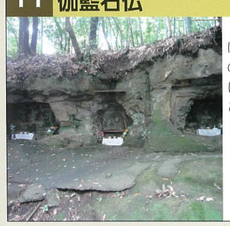
江戸時代、キリシタンに対する宗門改めが行われた頃、大円寺は証寺としての役割を担ったといわれている。また、明治9年（１８７６年）南大分で最初の学校「太田学校」を開校したところである。

10 杵築社



杵築社は寛永年間（１６２４～１６４４年）、太平寺村の鎮守として出雲大社の分霊を勧請したものである。祭神は大国主命（大己貴命）。この場所はかつて安国山太平寺の守護神、伽藍大明神の堂があった処といわれている。このお堂の中にご神体である三尺余りの石像が安置されており、これがガランさまと呼ばれていた。

11 伽藍石仏



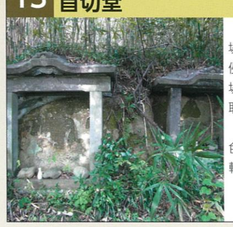
杵築社の前に、伽藍石仏（横穴式小石窟）と呼ばれる磨崖仏の三窟がある。右側の小窟には左右の壁に観音菩薩と不動明王の立像が彫られ、さらにこの奥の壁に阿弥陀如来坐像が刻まれている。これは、平安時代の作造といわれている。

12 延命地蔵（太平寺）

木製の地蔵で、手に錫杖を持っている。

公民館の上の竹藪にあった物を村人が探し出し、墓地（光西寺）の下に小さなお堂を建て祭ったと言い伝えられている。だが、初めから竹藪の中にあるはずはなく、羽屋にある千手観音と同じように、薩摩との戦いで太平寺の全てのお寺が焼ける前に、村人によって持ち出されたものと思われる。

13 首切堂



門の形をした石造物で、「首切堂」とか「首置場」と呼ばれている。かつて豊薩戦のころ豊後に侵入した島津軍により大友の武士が処刑された場所、あるいは合戦に遅れた島津方武将がそれを恥じて切腹した場所とも伝えられている。

奥にある門の形をした岩に「阿弥陀如来」の彩色の坐像がかすかに見える。また、向かい側に「五輪の塔」が約10基ある。

14 清水寺・音羽滝

歴史年表には、弘安８年（1285年）頃には清水寺は存在したと記されている。ご本尊の千手観世音菩薩は2体存在したらしいが、島津軍の戦火で寺は全焼し、ご本尊は火の玉となって羽屋に飛んで行ったとの伝承がある。現在清水家本家伝法院に祀られている千手観世音菩薩がそれである。

この清水寺の跡に京都の清水寺を真似た「音羽滝」と呼ぶ小さな滝があった。「おん滝」「めん滝」の二つがあり、「おん滝」の方はごく最近まではっきりと滝と分かる状態であった。

15 横穴墓（太平寺）

3世紀から6世紀にかけて造られた大型の古墳は次第に影をひそめ、代わりに太平寺・賀来・植田・下郡・羽田などの丘に横穴を掘り埋葬するようになった。この墓を横穴墓という。

このような墓になると豪族だけでなく、裕福な農民でも造れるようになった。入口の平らの所を「前庭」といい、トンネルが「羨道」で、奥の広い所が「玄室」という。玄室に石棺または木棺を置き、その中に死体を入れた。

太平寺の横穴墓は、大分市の調査で28基が確認されている。